

平成 30 年 6 月 1 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370625

研究課題名(和文) 自律学習促進のためのTAを活用したEFLライティングフィードバックの研究

研究課題名(英文) A Study on EFL Writing Feedback using TA for Promoting Independent Learning

研究代表者

大年 順子 (Otoshi, Junko)

岡山大学・岡山大学・全学教育・学生支援機構・准教授

研究者番号：10411266

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の4年間の研究実践により、日本人英語ライティングチュータートレーニングプログラムの構築を行った。チューターの発話には、personal affiliationおよびcompleting or amplifying the pointsという2つの特徴があり、チュートリアルトレーニングにおいて、それらの発話をチューターが考慮することにより、scaffoldingのアプローチが確立されることが確認された。

研究成果の概要(英文)：We have conducted a study for developing a Japanese English Writing Tutor training program for 4 years. Our study revealed that tutor's utterances have two features: personal affiliation and completing or amplifying the points. In tutorial training, it is suggested that those utterances by tutors should be considered for establishing a scaffolding approach.

研究分野：英語教育学

キーワード：EFL writing scaffolded feedback tutor training peer writing tutor thematic analysis
case study utterances

1. 研究開始当初の背景

プロセスライティングアプローチによるライティング指導では、最終原稿の前に教員やピアからフィードバックを受けることにより、自分のライティングを批判的にとらえライティングの質を高めていくことが期待される(Hyland & Hyland, 2010)。また、フィードバックを受けることは社会言語学的な見地からも「読者」の目を意識することで、自分のライティングに何が求められているのかを把握することとなり、意図を明確に伝える発信的なライティング力の促進が期待される。

本研究申請の代表者はこれまでに、教員フィードバックに焦点を絞って「EFL ライティングにおける記述フィードバックの研究」(基盤研究(C)23520673)を平成 23 年度～平成 25 年度まで行ってきた。その中で以下の 3 点を教員フィードバックの効果的な活用として提言することができた。

コンピューター(e-rater)が採点する ETS の Criterion システムのような、オンラインライティング学習ツールはライティングの自主学習を促進するうえで有益である。しかし、「内容」や「構成」といった要素に対してフィードバックを与えることは難しく、学習者も教員によるフィードバックを求めている。

教員が与えるフィードバックは、プロセスアプローチの中では、初回の草稿の後に評価基準表を提示しながら与えるのが望ましい。

学習者が教員フィードバックを受けて回顧的なコメント録(self-feedback sheet)を作成することで、学習者も教員のフィードバックをどのように認識したかを振り返ることができ、次回の課題に活かすことができる。

次に、TA による自主学習室でのピアフィードバックの可能性について論じていく。上述した 3 点は、大学の正規授業の場で今後大いに活用できることが期待される。一方、現在の大学の英語教育の場では、グローバル人材育成が急務となっており、教室外での自主的な発展的学習が推奨されている。そのような環境において、英語学習に助言を与える TA が将来のグローバル人材の候補生として活躍されることが期待される。このような環境の中で、同じ学生の立場である「先輩」としての TA が、教員フィードバックの方策を活用・応用して学習者にフィードバックを行うことにより、教員とは異なった効果が得られるのではないかと考えた。例えば、北米などに留学を目指す学生が受験しなくてはならない TOEFL iBT のライティングテスト対策として、上述の Criterion などが自主学習用に活用されているが、受験者は正規授業外で

ライティング練習を行っているのが常である。正規授業でない場合、教員によるフィードバックがいつも自由に得られるとは限らない。しかし、大学内に自主学習を促進するライティングセンターや自主学習支援室などの場があれば、TA を活用してフィードバックを受けることにより、「ライティングの質」および「読者の目」の両方の効果を取り入れることができる。

若林(2013)によれば、ピアフィードバックは教員フィードバックと対比されたり教員フィードバックを補完したりするものではなく、両者を効果的に使うことにより学習者のライティング力向上の相乗効果が期待できるものであるとしている。また、研究分担者の宇塚による研究(2013)では、学習者は TA を教員として信頼し、励ましを受けることで、英語力が伸びたと実感することが報告されている。したがって、教員フィードバックの研究である「EFL ライティングにおける記述フィードバックの研究」から得られた知見を自主学習の場で TA によるフィードバックに活用することにより、学習者のライティング力向上と、研究分担者のマリー(2012)が提唱している、自律的な学習空間を創造することが期待される。さらに、TA を将来グローバルな環境でリーダーとして活躍できる育成の場としての側面も本研究を通して探求を図った。

2. 研究の目的

本研究では、大学でのライティング指導を促進する方策としてティーチング・アシスタント(TA)によるフィードバックの効果的なアプローチを探っていくものであった。TA を活用することにより、教師によるフィードバックとは異なる「ピアフィードバック」の可能性を拓くことが期待された。TA のフィードバックをより信頼性が高く、ライティング向上に有益なツールとして活用することにより、学習者のライティングに対する教室外での自主学習を促進することを期待した。さらに、学習者にとっては、「先輩」という同じ学生の立場である TA からフィードバックを受けることにより、学習意欲が刺激されることが予想され、より自律した学習者へ育成することも本研究の目的とした。また、TA を将来のグローバル人材としてとらえ、identity の変化にも着目していき、TA 自身の成長についても注視した。

3. 研究の方法

本研究は、TA によるライティングフィードバックを体系化し、TA のトレーニングに活用したり正規授業においてのピアフィードバックにも応用したりすることを目指した。また、TA を将来のグローバル人材ととらえ、育成の

場としても位置付けて研究を実施するよう図った。これらの当初の目的を踏まえたとえ、実際の研究遂行過程の中で、以下の2点に絞り研究を実施した。

ライティング指導を行うチュータートレーニングプログラムの開発(5人の学生を養成)

TAを将来のグローバル人材育成の場としての自己成長の検証

まず、実際の研究を通して、当該研究のTAは、先輩学生として後輩にライティングのチュートリアルを行う実態から、「日本人英語ライティングチューター」と呼んだ。当該研究に参加するチューターを研究分担者の宇塚万里子が中心となって、5人採用した。採用の考慮事項として、(1)半年以上の英語圏への留学経験(望ましい)、(2)正規の英語ライティングの受講経験、(3)対人コミュニケーション力などを挙げた。これらの考慮事項から採用した5人の日本人英語ライティングチューターを対象に半年間の養成トレーニングプログラムを編成して実践した。

表1. Peer Writing Tutor Training Program

第1段階	Consolidating and reorganizing knowledge of academic writing Practicing argumentative essays on Criterion®
TA自身のライティング力強化	
第2段階	Practicing for providing feedback on argumentative essays Learning how to provide feedback both on macro and micro level issues in students' writing Role-playing in pairs for practicing giving feedback
フィードバックの内容とコミュニケーションの取り方の練習	
第3段階	Studying students' writing to determine the points for feedback Engaging in one-on-one writing tutorials with the students being helped Reflecting on their tutorial experiences
実際に後輩学生へのライティング指導(実地研修)	

第1段階において、チューター自身のアカデミックライティング力を強化するために、ライティング知識と学習をトレーニングの第1段階とした。

第2段階では、チューター同士でロールプレイを行い、実践することによりチュートリアルでのやりとりを体験させた。ライティング評価の指針となるフィードバックの内容およびコミュニケーションの取り方について、

指導教員(研究代表者)のもと、チューター同士に話し合わせながら自らが主体的にチュートリアルを実践できるよう指導した。第3段階では、実際に後輩学生へのチュートリアルを2回行い、これまでのトレーニングの知識と練習を実地研修を通して実践させた。2回の研修は録音され、その後、チューターおよび後輩学生をインタビューして分析を行った。

第3段階の2回のやりとりを分析することにより、コミュニケーションの取り方に注視してチューターのidentityの変化を検証した。研究分担者のマリー・ギャロルドとともに会話を分析して、scaffoldedアプローチに基く具体的な特徴を分析した。

4. 研究成果

本研究の4年間の研究実践により、研究目的に合わせて以下2点の知見と結果をまとめていく。

先輩学生による日本人英語ライティングチュートリアルトレーニングプログラム開発

チューターの自己成長を反映するscaffolding フィードバックの特徴

まず、に関しては、表1のチュータートレーニングプログラムが機能することが参加チューター学生と指導を受けた後輩学生からの振り返りアンケートやインタビューにより明らかとなった。チューター学生の振り返りコメントの特徴としては、「指導者としての自覚」、「コミュニケーションの取り方、特に褒めることの重要性」、また「信頼性獲得の重要性」などが、自身の成長につながるポイントとして挙げた。一方、当該トレーニングを通して、「英語ライティング力の未熟」に気づき、さらに向上しなくてはならない、という反省が生まれたとコメントした。この点については、今後英語ライティングチュートリアルプログラムを編成するうえで、チューター同士でのライティング力向上ワークショップなどを企画するなど、チューターのライティング力を高める試みがさらに必要であることを研究者自身痛感しているところである。

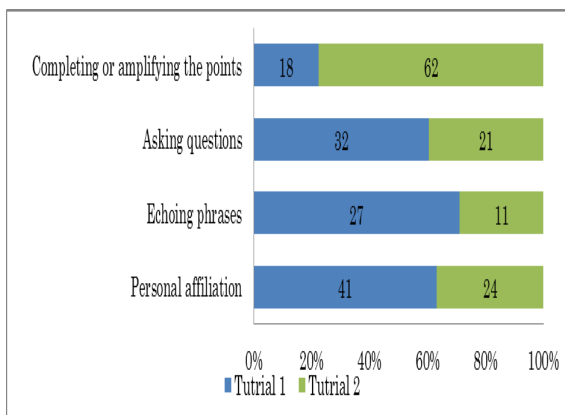
このチュータートレーニングプログラムの成果に関しては、2015年にオークランド工科大学で開催された Symposium on Second Language Writing で発表を行った。

次にチューターの自己成長を反映するscaffolding フィードバックの特徴については、以下の4つのアプローチが抽出された。

(1) completing or amplifying the points

- (2)asking questions
- (3)echoing phrases
- (4)personal affiliation

図1 . Scaffolded フィードバックの変化



まず(1)completing or amplifying the points は、学習者の発話や考えをチューターが理解して補完し、展開することを意味している。図1のように、1回目のチュートリアルセッションよりも2回目の方が回数が増えていることが分かる。(2)asking questions は、学習者のライティングの内容に関してチューターが質問しており、図1のように、1回目のチュートリアルの方が回数が多くなっている。(3)echoing phrases は、学習者の発話にチューターが同調する発話を指している。これも1回目のセッションの方が多く抽出されている。(4)personal affiliation は、チュートリアルでのコミュニケーションを円滑に進めるうえで、「励まし」、「称賛」、また「労い」など、感情的な発話が含まれている。これも1回目のセッションの方が回数が多い。この図1の scaffolded フィードバックの変化から、1回目のチュートリアルでは、学習者の信頼関係を築くために、特に(4)personal affiliation が多く、2回目になると学習者の発話が増えて、それを補完し展開するための(1)completing or amplifying the points が増加したと分析した。

これらの結果を、2016年にポーランドのウッチ大学で開催された、European Writing Centers Association において、チュートリアルトレーニングをケーススタディーとして発表した。学会参加者からの指摘をさらに研究に取り入れて、2017年にタイのチュラロンコン大学で開催され Symposium on Second Language Writing において、チュートリアル会話分析から scaffolding に基づく発話表現を発表した。

提言として、チューターの発話には、personal affiliation および completing or amplifying the points という2つの特徴が

あり、チュートリアルトレーニングにおいて、それらの発話をチューターが考慮することにより、scaffolding のアプローチが確立されることを報告した。また、日本のような年齢に応じて上下関係の立場を考慮する文化では、チューターは学習者よりも年上である方が scaffolded フィードバックが成立しやすいことも、ケーススタディーの参加者からのインタビューで判明した。これらの発表をまとめたものを論文の形で、*Studies in Second Language Learning and Teaching* に投稿しており、現在第2 審査結果を待っているところである。

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

Neil Heffernan, Junko Otoshi (2015)
Comparing the pedagogical benefits of both Criterion and teacher feedback on Japanese EFL students' writing
JALT CALL Journal (1). 63-76 査読有

Junko Otoshi (2015). Training Student Writing Tutors from Sociocultural Perspectives
JACET 関西支部ライティング指導研究会紀要 11, 31-36 査読有

宇塚 万里子 大年 順子(2014). L-café (ソーシャル・ラーニング・スペース/言語カフェ)における『スチューデント・ティーチャー』制度についての検証」
岡山大学教師教育開発センター紀要 4 90-96 査読無

[学会発表](計 3 件)

Junko Otoshi, Garold Murray
Scaffolded Peer Feedback in EFL Writing Tutorials
Symposium on Second Language Writing
Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand
2017年7月2日

Junko Otoshi, Garold Murray, Mariko Uzuka
Training Peer Writing Tutors
European Writing Conference Association Conference ポーランド ウッチ大学
2016年7月8日

Junko Otoshi, Garold Murray, Mariko Uzuka
Training Peer Writing Tutors: Practice and Perspectives
The 14th Symposium on Second Language Writing

AUT University, City Campus, Auckland,
New Zealand 2015年11月19日

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

大年 順子 (OTOSHI, Junko)

研究者番号：10411266

岡山大学・全学教育・学生支援機構 准教授

(2)研究分担者

マーリー ギャロルド (MURRAY, Garold)

岡山大学・全学教育・学生支援機構・准教授

研究者番号：40307244

宇塚 万里子 (UZUKA, Mariko)

岡山大学・グローバルパートナーズ・教授

研究者番号：40601381

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()